

平成17年度

日本薬剤師会学校薬剤師部会研修会

平成17年7月15日(金)

東京・渋谷：長井記念ホール

「子供たちの健康をめぐる話題」

文部科学省スポーツ・青少年局学校教育課専門官 岩崎容子先生

最近、アスベストの害がマスコミ等で取り立たされているが、現在、アスベストの環境基準は設定されていない。今後、文部科学省で検討する。

近年の青少年の発育状況は、身長、体重とも伸び続けていたが近年は、平行状態にある。また、肥満は、11歳、12歳をピークに減少していく。この肥満は、成長過程の肥満か成人病予備軍の肥満かを見極めなければならない。一方、痩せは、年齢が上がるにつけて、増加している。タバコは、男性の40%、女性の30%が喫煙したことがあり、酒は、男女とも80%以上に飲酒の経験がある。出会い系サイトは、女性の12.6%、男性の8.5%が利用した経験があり、1~2%の女子高生が援助交際の経験がある。薬物の使用は、女性より男性の方が多い。性交経験は、高3女性で40%弱の経験があり、初体験は、16歳、高1、高2が多く経験人数は、1人から4人以上が多いという報告があった。当然のことながら、10代の人口中絶も増加し性感染症も蔓延している。アレルギー疾患は、1年以内に医師からアレルギーと言われた割合は、約17%で、1年以上前に言われた割合は、30%前後と高くなっている。アレルギーの内容も、喘息が約40%、鼻炎が約60%で高くなっている。平成16年よりアレルギー疾患に関する調査研究が実施されており、結果によっては、空気清浄機やシャワールの設置が必要になってくるであろう。いじめは7年連続減少している。

今の時代の要請により、HIV、薬物乱用、性行動に対する対策が必要になっている。今後の健康教育の進め方として、学校保健委員会の活用 学校と地域の連携 個別対応へのアドバイス(専門家の活用) 健康教育の充実等を行っていかなければならない。子供たちの心身の健康の為に教育は最大のワクチンである。

「『健やか親子21』の取り組みについて」

厚生労働省雇用均等・児童家庭局母子保健課主査 田母神裕美先生

健やか親子21とは、21世紀の母子保健ビジョンであり、各関係者が一体となって推進する国民運動計画であり、少子化対策としての意義と、健康日本21の一翼を担うという意義がある。健康日本21は、生活習慣病が主であるが、健やか親子21は子供たち、親子の健康を守ることが主であり、その主要課題は、思春期の保健対策の強化と健康教育の推進 妊娠・出産に関する安全性と快適さの確保と不妊への支援 小児保健医療水準を維持・向上させるための環境整備 子供の心の安らかな発達の促進と育児不安の軽減である。思春期の問

題は、思春期における性行動の活発化・低年齢化による人口妊娠中絶や性感染症の増加や、薬物乱用、喫煙・飲酒、過剰なダイエットの増加。心身症、不登校等の心の問題。子供の自殺、殺人、暴力といった問題がある。この問題に対する保健対策には、学校における相談体制、保健所等の地域における相談体制の強化等の量的拡大と、学校外の専門家の協力やインターネットなどの媒体を通じ思春期に関する情報提供などの質的転換がある。健やか親子21の推進方策は、取組の内容の明確化や計画期間と具体的課題を明確にした目標を設定し、5年目に実施状況を評価し、場合によっては見直しを行う。関係者、関係機関、団体も課題達成に向けて、それぞれの立場から寄与することが必要で、日本薬剤師会も薬物乱用の有害性について若者への知識の普及・啓発、十代の喫煙の防止等で活動を行っている。

「喫煙防止の実践活動について」

公立学校共済組合東北中央病院放射線科部長 禁煙外来 大竹修一先生

最近、アスベストの問題がマスコミを賑わしているが、アスベストより、受動喫煙の方が健康的に危ない。

喫煙の害で癌（肺、咽頭等）はよく言われているが、もっと大きな害に、肺気腫がある。10年以上喫煙した人は、ほとんど一部が肺気腫になっている。この肺気腫は通常のCTスキャン（1cm幅）では診断できず、2mm幅で撮影するとわかる。タバコの影響で、以前、先代の貴乃花親方が言った言葉がある。「私は、タバコをやめなかったから横綱になれなかった。千代の富士はタバコをやめて横綱になった」スポーツに喫煙は、大敵である。

最近の喫煙の状況は、男性は喫煙率は低下しているが、女性は平行状態、若しくは、増加傾向にある。タバコは「ゲートウエイドラッグ」と言われているが、実際に問題を起こすほとんどの青少年が、タバコを吸っていることをみても、ニコチン（タバコ）は、一線を越える時に使える薬であるといえる。また、10代で妊娠した子供の父親が全員、母親の60%が喫煙していることからしても、タバコが青少年に悪影響を与えているのは事実である。

青少年のタバコに対する意識は、小学生は「みんなタバコが大嫌い」、中高生は「友達が吸っているからという興味。いつでも止められるという軽い気持ちでなんでも初体験」というある面では、軽い気持ちである。しかし、ほとんどの喫煙者が「始めなければよかった」という気持ちをもっているのも事実である。

私たちが青少年に対して教育しなければいけないことは、「吸ってはダメ」ではなく「だまされてはダメ」である。タバコはすぐに止められる。昔は、みんな吸っていたから害は無い。タバコを吸うのはカッコいいと思わせる様なCMなどに騙されている。だまされてはいけない。タバコは自分自身に害があると同時に、家族にも害がある。そして、タバコを止めることは、自分自身にやさしく、家族にもやさしいということを青少年に教えるべきである。タバコは毒の缶詰である。そして、タバコを吸う人は、タバコ会社からすれば、使い捨てのお客さんである。

タバコの話をする時には、必ずニコチン中毒の問題になる。しかし、ニコチン中毒の話は、

医師、薬剤師等医療関係者しか話せない。薬剤師は、ニコチン中毒による依存性がどのようなものか、体にどのように悪影響を及ぼすか、家族や周りの人にどれだけ影響を与えるか、アスベストとは比べものにならない悪影響を与えているということを教えるべきである。未成年者の喫煙は「精神論」ではなくニコチン中毒という病気として対処しなければならない。

タバコを止める方法の一つにニコチンパッチがある。ニコチンパッチを使用すると、約80%の効果がある。中高生の場合、ニコチンパッチ20mgからスタートし、数日間で終了する。しかし、中高生の場合、再び喫煙を始める可能性が高い。

文責：沖田敏宜